

- * 囲いの中に羊がいる。門があり、ここから入る者は羊の牧者であり、他のところを乗り越えて入るものは盗人や強盗である、とイエスはたとえで言われる。牧者とはイエス・キリストご自身であり、羊とはイエスを知っている人たち、盗人や強盗はユダヤ人たち、特にパリサイ人を指している。
- * 「わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。」(ヨハネ10:9) イエスこそ救いに至る道への唯一の門である。この門を入れれば、安らかに、いつも青々とした牧草を食べて生きることができるのである。律法を厳格に守るパリサイ人が来ても救われない、まして、偽キリストや他の神々がきてもまことの魂の救いはない。「狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見出す者はまれです。」(マタイ7:13~14) このイエス・キリストという方を通して出なければ救いはないのだ。(使徒4:12 参照)
- * 「わたしは良い牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」(10:11) 15節、17節にも「羊のためにいのちを捨てる」とイエスは言われる。この犠牲の死は、これから起こる十字架の死のことを言われている。羊は目が悪く、弱い動物で、すぐに危険にさらされる。また、群れから離れて迷ってしまいやすい。まさに私たちのようである。牧者キリストはこのような羊を所有しており、一匹一匹を知り尽くしておられる。また、イエスを私の救い主であると告白した者は牧者を自分のものとし、良く知っている。私たちとイエス・キリストは良い牧者と弱い羊の関係なのである。
- * 「わたしにはまた、この囲いに属さないほかの羊があります。わたしはそれをも導かなければなりません。彼らはわたしの声に聞き従い、一つの群れ、ひとりの牧者となるのです。」(10:16) ユダヤ人たちは本来羊の囲いの中にいるはずの人たちであったが、ほとんど者は門からはいっていなかった。イエスを信じていなかった。彼らを導くことは勿論必要ではあったが、イエスはさらに大きなことを考えておられた。すべての異邦人を導いて救いの中に入れることであった。そして、この門を通過して入ったすべての羊は一つの群れとなると言われる。すなわち教会は本来一つであるべきなのである。